

76 第二次世界大戦後の台湾の寄生虫対策と日本の国際協力

誌上発表

容 世明

長庚病院

台湾では1970年代以前に寄生虫感染症が蔓延していました。台湾の寄生虫制御の成果には、1965年に島全体でマラリアが根絶され、1978年に金門でフィラリア症が根絶され、1985年に農村部で腸内寄生虫が制御されたことが挙げられます。井上弘樹は、1960年代から1970年代にかけての寄生虫の予防と制御における日本と台湾の医療協力について論じ、その理由を分析した。第一に、戦前に形成された人的関係に基づく。帝国大学医学部の卒業生である横川宗雄と大鶴正巳は、戦後、台湾との技術・知識交流を通じて、日本と台湾の医学界の関係を再構築しましたが、寄生虫予防のための技術と資金の不足という問題に直面し、第三に、寄生虫症の予防と制御に関する日本独自の経験を生かして、海外の医療協力を促進することです。

森下薫(1896-1978)は、1923年に台湾総督府中央研究所の技術者として台湾に来て、台北帝国大学医学部の設立後、衛生学の教授を務めました。戦後も国立台湾大学教授を務め、1947年に帰国し、その後大阪大学医学部教授を歴任し、1974年にはアジア寄生虫予防機構理事長ました。台湾の高雄医科大学の寄生虫学教授である謝獻臣氏は、次のように述べています。私がまだ国立台湾大学医学部に在学中の頃、留任されていた元台北帝大医学部寄生虫学教授の森下薫先生の講義はとても刺激的で、毎回楽しく授業を受けていました。森下先生の微妙な影響もあり、もともと生物学に興味があった私は、自然と基礎医学の寄生虫学を選択し、専門的な学術研究の長い道のりを歩み始めました。森下さんは当時、本当に多くのインスピレーションを与えてくれたと言っていました。「あなたの中国人には多くの種類の寄生虫症があり、それらは非常に蔓延していますが、この分野の研究に従事している人はほとんどいません。それは残念です。また、寄生虫研究に携わる決意を固めました。森下薫は、卒業後の謝獻臣のキャリアプランに影響を与えました。

森下薫のほか、台北帝国大学医学部の卒業生である大鶴正満と横川宗雄も、台湾の寄生虫の予防と制御に活躍しました。横川宗雄の父は、台北帝国大学の寄生虫学主任教授である横川定です。横川宗雄、高雄医科大学の謝獻臣、および台湾省マラリア研究所は、台湾で回虫の予防と制御のためのプログラムを共同で開発し、1966年から1967年にかけてパイロット研究を実施しました。1967年6月、世界保健機関はジュネーブで回虫管理専門家委員会を招集し、会議での台湾の調査データを引用しました。横川宗雄は、台湾の3人の博士課程学生、陳瑩霖(高雄医科大学寄生虫科)、韓良誠、蔡昭雄を指導しました。

大鶴正満(1916-2008)は、1940年に台北帝国大学医学部を卒業し、戦後帰国し、新潟大学医学部長、琉球大学医学部長を歴任しました。1970年3月の10日間、海外技術協力機構は、横川宗雄を班長とし、大鶴正満等と共に台湾に派遣し、3月31日、台湾と日本は台北市で寄生虫対策について協議し、日本側が専門家を台湾に派遣したこと、台湾側が人員を日本に派遣して研修を行ったこと。日本側は、防虫剤や防虫具などに1970年に945万円、1971年に1455万円、1972年に1645万円を3年間補助する予定だ。日本と協力して、1971年に南投県の全国学校児童回虫実証制御プロジェクトが開始され、3年間続きました。

1974年10月、アジア寄生虫予防機構の最初の会議が日本の東京で開催されました。台湾からの代表者は次のとおりでした。衛生署長王金茂、衛生處長胡惠徳、マラリア研究所の周俊雄氏らが会議で台湾の寄生虫対策の現状を報告した。アジアの寄生虫予防機関の最初の会議は7つの結論に達し、その4つ目は、寄生虫制御と家族計画の力を組み合わせ、双方で取り組み、南投県実証プロジェクトを実験として使用することです。

台湾の公衆衛生および医療システムに加えて、台湾の寄生虫制御の関係者、世界保健機関、および米海軍の第二医学研究所は、寄生虫制御および研究に補助金を提供したり、参加したりしています。1970年代、日本の海外技術協力機構は、医薬品、設備、資金を提供し、寄生虫の専門家を台湾に派遣して寄生虫駆除に協力しました。戦後の台湾の日本人専門家は、寄生虫の予防と制御に関する知識の普及に参加し、台湾医科大学の寄生虫分野との知識の血統と学術的なスレッドも持っていました。